二　町の自然と風土

(一)　佐賀平野のなりたち

1　平野の成因

佐賀平野は脊振山地の南側から杵島山地の東側に広がる平野で、有明海の湾奥部に臨んでいる。筑紫平野の西半を占め、一般的に筑後川から六角川までの間を佐賀平野、六角川以南を白石平野と呼ぶことが多い。

この平野には九州第一の大河筑後川はじめ嘉瀬川、六角川などの河川が流入している。これらの河川は上流山地から多量の土砂を搬出するが、有明海は潮汐干満の差が大きいことは日本第一で、干潮時には河川の搬出する遊泥ははるか沖合におよび、満潮にはさらにこれを逆搬して、海岸線に堆積する。この自然の労力は劫初以来日夜繰返されて、海岸に広大な干潟を形成し、最大巾員四キロメートルにおよぶことがある。

この干潟は佐賀平野の原始景観というべきもので、自然陸化地の開墾や、干潟の干拓によって漸次有明海は埋積される宿命にある。佐賀平野はこのような自然の営力と、これを利用した人為的な干拓によって造成された沖積平野であるから、低平にして地味肥沃、わが国有数の米作地帯となっている。

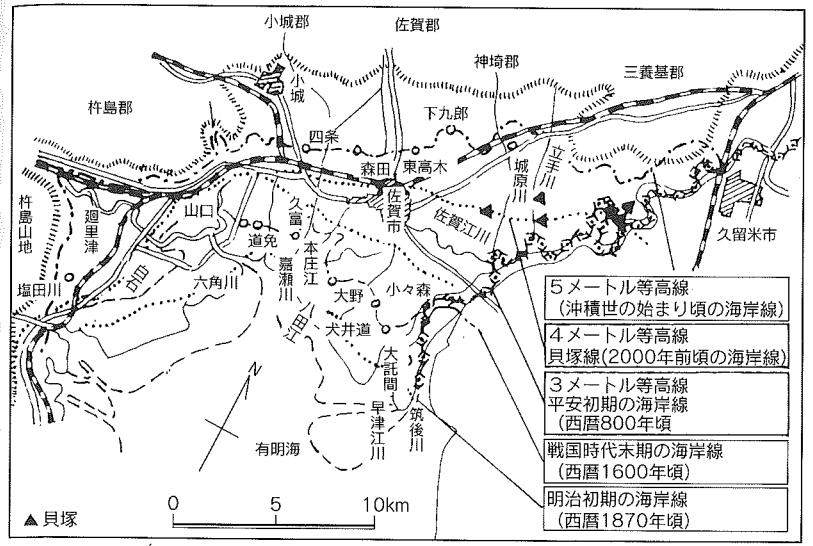
有明海の潮汐干満差は湾奥部が最も大きく、六角川口の住ノ江において、大潮時の最大差六メートルに達するが、満潮は六牟田沖から時計の反対まわりで北上有明海の北岸沿いに西進するので、筑後川の搬出する遊泥は、主として佐賀平野の地先に堆積する。したがって佐賀平野の地先は干潟の成長が速かで、とくに筑後川右岸の川副町犬井道地先が顕著である。かつて九州農業試験場の故村岡碩市技師の測定によれば、川副町犬井道地先の干潟の成長量（上昇量）は年七センチ、東与賀町大授搦地先の干潟は四・五センチ、白石平野地先のそれは所により較差があるが、一・五～二・〇センチと西するにつれて漸減し、干潟の土質も西漸するに伴い微細となる。白石平野の土壌が極めて重粘な埴土からなるのは、前記の干潟生成の理由による外、背後に控える杵島山地が、比較的硬質の安山岩や石英粗面岩などから成り、六角川や塩田川の搬出する土砂が極めて微粒子から成るからである。白石平野が今日蓮根や玉ねぎの特産地域となっているのは、この重粘な埴土に負うところがあると思われる。

以上は『嘉瀬川農業水利史』にみえることであるが、本町の平野もこの間にあり、嘉瀬川の搬出する多くの土砂を加え堆積によってつくられたと考えられる。

2　平野の進展

佐賀平野の北部五メートル等高線は縄文時代後期の海岸線とみられる。下底に牡蛎殻層を有する溝渠の北限に当り、洪積層と沖積層、畑作と水稲作の漸移地帯となっている。また牛津・佐賀・諸田・江見・久留米を結ぶ道路の線は、概ね海抜四メートル前後で、弥生時代の貝塚が散在するところから、約二〇〇〇年前の海岸線と推定されている。

図2　佐賀平野進展図



平野の進展は沖積作用の旺盛な筑後川右岸地区が最も顕著である。三養基郡三根町の石井、持丸の貝塚から、筑後川右岸沿いに佐賀郡川副町南端の干拓地に至る二〇キロメートルの平野進展量は、鎌倉時代末期からはじまった干拓を含め、年に一〇メートルの割合で平野が進展している。平野の進展は西にいくほど漸減し、本町の場合年に一メートルないし二メートルくらいではなかったかと想定できる。平野の特殊景観をなしている溝渠（クリーク）網は、概ね五メートル等高線以南に分布している。これは干潟時代の澪（江湖）筋の名残りで、のちに人工を加え堀としたもので、律令時代以後潅漑排水用として掘開した環濠などである。

前記した海抜四メートル線から、図2に示したように平安初期とみられる海抜三メートル線は佐賀市東南の米納津、南里、飯盛、今津、新田、芦刈町の下古賀、川越を結ぶ線とみられている。この間の開発は極めて長年月を要している。それは干潟の自然陸化を待って開発した開墾地域であるためである。その後戦国時代の海岸線とみられる海抜二

メートル線は、犬井道、小々森、大野、久富、道免、永田のラインと考えられている。江戸時代から明治初期の海岸線は海抜一メートル線ということになる。本町の搦東の松土居は寛永年間（一六二四―四四）に築造されている。この松土居から八〇〇トル南に第二土居がある。この堤防は維新前までは潮土居で地先は干潟であった。この堤防は邑主村田氏が増築したもので、明和年間（一七六四―七一）に築造されている。またこの地先に昭和九年久保田干拓の工事がはじまり、同十三年潮止工事完了、それ以来一八五㌶の新農地が生まれ、この地先が現在の有明海に面する第一線堤防となっている。

ここで述べた平野の進展度や海岸線の南下は、地図にみるような単調なものではなく、嘉瀬川などが佐賀平野の柔軟な沖積層を自由に浸蝕乱流して、大小無数の三角州を形成し、比較的に成長した大三角州が早期に開発されたことが考えられ、したがって海岸線の出入りも複雑であったとみるべきである。

なお平野の開発については、(三)久保田平野の展開のところで説述する。

(二)　有明海の誕生と変遷

久保田町は嘉瀬川のゆたかな流れと、有明海の激しい干満による沖積作用を母胎とした自然陸化と、干拓によって誕生した土地柄である。深井戸を掘ると蛎殻などがいたるところから出土して、かつてこの地が有明海の海底であったことを物語っている。本町の歴史は有明海を無視して語ることはできない。

現在でも本町南部の漁村では海苔養殖を行っており、かけがえのない海である。まずは有明海の誕生、その変

遷による平野の進展などから、郷土のなりたちを眺めてゆきたい。

1　有明海の名称由来

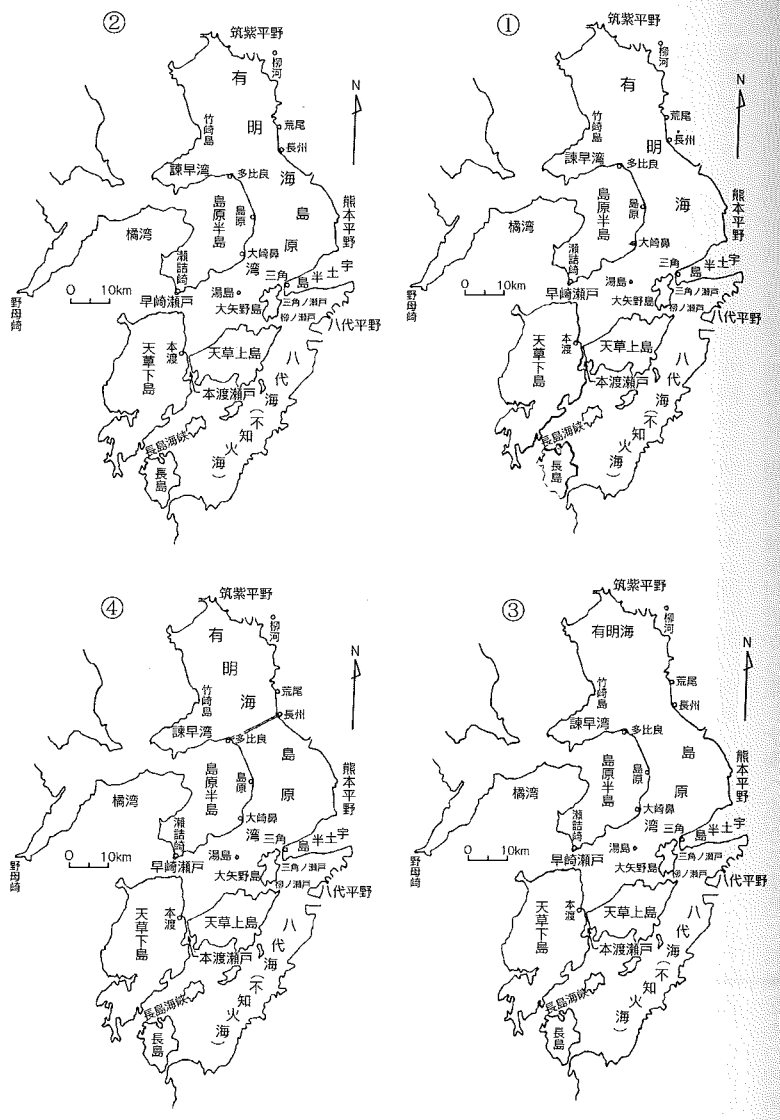
有明海の名称がいつごろから公称されたかはっきりしない。明治十七年刊の『佐賀県地理小志』には有明沖とみえるが、正式に有明海という名称が用いられたのは明治三十二年の陸地測量部の五万分の一の地図で、佐賀県の地先に小さく「有明海」としるされ、その沖に大きく「築紫の海」と記されているのがはじまりとみられる。明治三十九年の『佐賀県案内』には「築紫の海」（一名有明海）と表現されている。

有明海と名称が単独でつかわれるようになったのは、明治四十五年の陸地測量部発行の二〇万分の一地図以後のことで、それ以前の地名辞書や地図類には「築紫海」「築紫潟」の名でしるされている。したがって「有明海」と公称されるようになったのは、明治末年以後のきわめて新しいことといえる。土地の人たちは有明海のことを単に前海（まえうみ）と呼んでおり、「前海物」といえば、有明海でとれる魚や貝のことをさし、前海物専門の魚店もある。

現在、有明海の名前は公認されているが、有明海の入口に島原湾があり、その奥に有明海があるのは少しおかしなことである。東京湾や伊勢湾の例からいえば有明湾といった方がよいかもしれないが、鹿児島県の志布志湾を別称「有明湾」と称しているので、重複を避けたのかもわからない。

この有明海の名称や範囲などについては、国土地理院、海上保安庁、百科事典など不統一であるので統一が望まれている。さまざまな有明海の名称を参考のため図3にした。

図3　さまざまな有明海（①慣習上・②国土地理院・③海上保安庁・④事典の有明海）



なお有明海に面する佐賀県、長崎県、熊本県の沿岸には有明町があり、この海を一般の人は有明海と認知しているので、島原湾の名前は除くことが望まれる。

2　有明海の誕生

有明海の誕生がいつごろであるか、九州大学や資源科学研究所、九州農政局の学者らが中心となって、有明海研究グループがつくられ、各分野から本格的な調査が行われた。その主なものは郷原保真『九州地方のテフロクロノジー』（第四紀研究第三巻一―二号）、有明海研究グループ『有明・不知火海の第四系』（地学団体研究会専報第一号）、首藤次男『九州の最新統諸層の対比』（地質学雑誌六十八号）、亀井節夫『有明海の旧象化石』、『有明海のなりたち』下山正一（有明海大全）などの論文を参考にさせていただいて有明海の変遷を略記する。

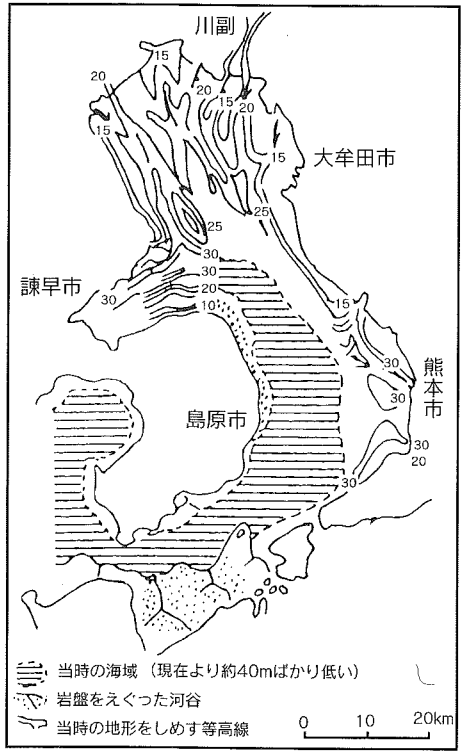
現在の有明海が誕生するまで、何百回という地殻の変動があり、またその間数十万年という長期の氷期（現海面より数十㍍水位低下）や間氷期（現海面より数十㍍水位上昇）の繰り返しがあった。有明海では現在深いところは、湾口の早崎瀬戸の海釜（海底の地形の一つで、その形は円形、楕円形をなし小深い所）一三五㍍と湯島付近の海釜一五四㍍だが、これらの海釜は、その昔、瀬戸内海と有明海がつながっていたときの潮流（あるいは有明海が陸地だったときの川の流れ）によってできたものと考えられている。

有明海の原形ができたのは、約三〇万年前のリス・ウルム間氷期の海進にともなう湾入（古有明海）とみられているが、いまの有明海の形状とは全く異なり、現在の諫早付近から東シナ海へ広がる東西に長軸をもつ内湾であったことがわかっている。

古有明海があったところは、現在の有明海の島原半島より水深三〇㍍ないし四〇㍍深いところで、この海底は層の厚さ、最大三〇㍍、平均二〇㍍におよぶ有明粘土層と呼ばれる軟弱な粘着力の強い土が堆積している。これが潟土とかヘどろといわれるもので、その下には島原海湾層と呼ばれる平均二五㍍の砂礫層が、広く平坦面をなして形成している。なお、島原海湾層の下には、阿蘇山の爆発物である軽石凝灰岩層がある。この阿蘇山の爆発は、いまから三万三〇〇〇年前のことで、当時の有明海は現海面より五〇㍍以上低下していた。島原海湾層ができたのは、一万一〇〇〇年ほど前で、当時の有明海面は、現海面より四〇㍍以上低下していた。したがっていまの有明海や不知火海のほとんどが陸地で、当時の有明海はいまの江湖筋のように、細い川状のような形で湾入していた。

有明海の海底からは、鮮新世から洪積世の終わりにかけ、いろいろな動植物の化石が発見されている。動物の化石は、ステゴン象とナウマン象で、島原半島近くの海底で多く発掘されている。植物は

図4　古有明海図



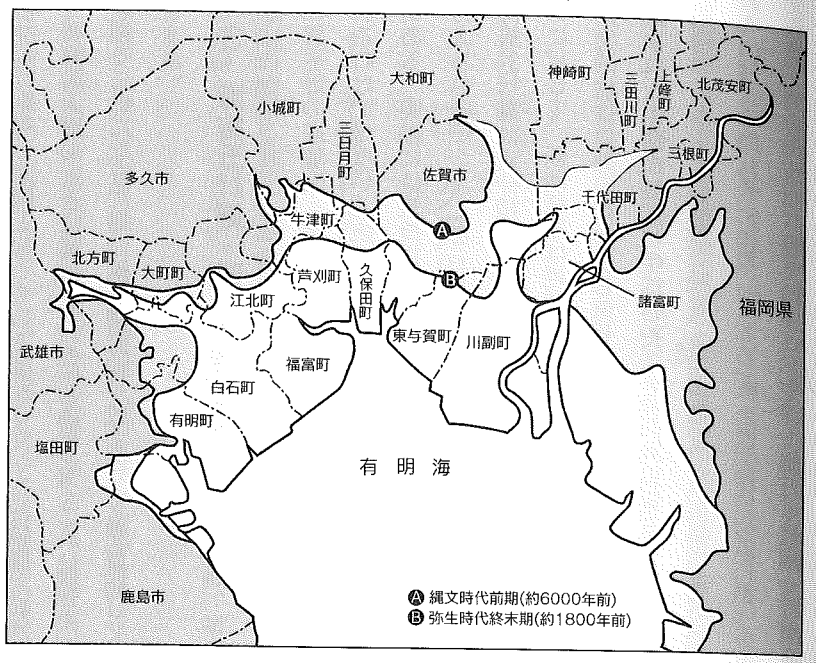
現在多良岳や脊振山頂付近にみられるブナやナギなどの化石が発見されたことは、かつて有明海の大部分が陸地であったことを物語っている。

現在、有明海に注ぐ最大の大河筑後川の河口から、有明海へむかって、海底水道や埋没谷がみられないのは、筑後川が有明海へ注ぐようになってまだ新しいことを示している。ところで、そのころ佐賀県には、人類はいただろうか。小城郡三日月町東分や多久市三年山付近には、いまから三万年以前に人類がいたことがわかっており、いまの有明海付近の平野部に、狩りに出かけたことも想像される。

一万年ほど前の有明海は、ほとんどが陸地で、いまの海面より約四〇㍍ほど低下していたが、この一万年前後期を境に、気温が上昇しはじめ、大陸氷河や山岳氷河が溶けはじめたので、いまから七〇〇〇年ほど前には、有明海が佐賀平野部に深く浸入、いまの佐賀郡大和町尼寺付近の海抜六㍍線前後まで海となった。

有明海は干満差の大きい海で、大量の海水が押し上げてくるので、干潟縁辺では底土をはぎとって大きな力を生じ、底土が浸食され巻き上げられる。巻き上げによって砂分と泥分は分離する。これは砂と泥とでは運ばれ方に差があるためである。運ばれにくい砂は近くに残留して堆積するが、泥はにごって運ばれやすく、大量の海水とともに湾奥部に達するので、杵島郡や鹿島沖に泥干潟ができやすい。湾奥の狭い河口に大量の海水が集中すると、河口の底土をはぎ取る力が再び増大し、底土を巻き上げて更に高密度の泥水をつくる。泥水は大量の海水の後押されて河川を逆流して淡水と強混合するので、塩分濃度は急速に低下する。これが「淡水（あお）」である。有明海に注ぐ河川の下流ではかつてどこでも大量の泥土が逆流し、上流の逆流限界付近に堆積してアシ原を埋め立てていた。引き潮のとき陸地の栄養と混じった泥土が河口から海に戻り、豊かな有明海をつくってきた。有明海沿岸

図5　地質からみた海岸線の変遷



の平らで低い土地、いわゆる低平地は干潟が陸地に変わったものでなく、泥土の埋め立てによってできたものである。

近年低平地研究学会や地質調査業会の研究やボーリング資料によって、地下の堆積物による海域などがわかるようになり、図5に示すような縄文時代早期、弥生時代末期の海岸線がわかるようになった。

縄文時代中期から弥生時代にかけ、寒期が強くなり、北洋では氷河ができはじめたので有明海の水面はしだいに低下を続け、約五〇〇〇年ほど前には、いまの神埼郡千代田町付近まで筑後川を挟んでラッパ状に奥深く、有明海が入り込み、現在の海抜五㍍線付近に海岸線があったのではないかとみられている。現在の有明海の原形は縄文時代後期にできたと考えられている。海抜等高線の下底には牡蛎殻層を含む溝渠

があり、牡蛎層の北限となっているばかりか、古沖積層と新沖積層の境界線にも当っている。

有明海の大潮のときは潮位が五㍍にも達する。これは約五〇〇〇年前の海岸線であった海抜五㍍の等高線まで、潮が遡ることになり、海岸線と潮位が一致することを証明している。

3　海抜五㍍線・四㍍線の意味

佐賀平野の進展図（図2）を参照すれば、海岸線の変遷が一目瞭然（りょうぜん）のようにみえるが、この線が即海岸線といわれるわけではない。図5のボーリング資料の海成層の分布からの海岸線と合わせてみると一致する点としない点がある。実際には筑後川や嘉瀬川などの乱流によって、大小のデルタが散在し、複雑な海岸線を形成していたと考えられる。

海抜五㍍線は古沖積層と新沖積層の水田と畑作の漸移線としての意味をもち、古沖積層の地盤が高燥強硬であるのに反して、新沖積層は地盤も低湿軟弱であるという性質をもっている。

縄文時代は自然の動植物に依存した採集経済の時代であったので、一定の定住生活を営まず、良質の水と食糧に恵まれた山間山麓部に生活したことが、今日遺跡として発見されている。海抜五㍍線付近から南にかけては、有明海の広大な干潟荒野が続き、葦（あし）原には多くの野獣や渡り鳥などが生息していたことが考えられる。

本町はこの時代まだ出現しておらず、有明海の海底にあったと思われる。

佐賀平野の海抜四㍍線を結ぶと、牛津―徳万―嘉瀬―佐賀を結ぶ国道二〇七号線と、佐賀―詫田―江見―久留米を結ぶ国道二六四号線付近となる。この線は弥生時代の海岸線と考えられ、国道二六四号線沿いには多くの貝塚が分布している。国営公園として著名な吉野ヶ里遺跡のあった頃の海岸線とも考えられる。その後筑後川や脊振山塊から流入する嘉瀬川はじめ、中小河川の土砂の堆積や干潟の成長による自然陸化が促進された。人工の開拓や干拓が実施されはじめたのは、鎌倉時代以後といわれている。

本町の場合海抜四㍍線はＪＲ久保田駅付近に当り、かなり広大な干潟が形成されていたのではないかとみられる。

(三)　久保田平野の展開

1　干拓はじめの漸移地帯

本町の開発を考える場合、大きな基準線となるものが四つある。第一は自然陸化地の開墾から干拓地に漸移する境界線というべきもの。第二は戦国時代末期の海岸線。第三は江戸時代の松土居線。第四は明治以後の干拓推移である。

すでに前述したように、有明海沿岸の干拓は、鎌倉時代元寇直後の恩償地不足などから、干潟の開発が急がれた。佐賀郡大和町の高城寺に伝わる古文書によると、佐賀市東南の川副町南里、米納津を結ぶ道路南面の干潟荒野を寄進させた記録がある。これを規準として、旧堤防の痕跡と考えられる道路や、当該地の標高、地先の潮位、

隣接地の関係位置など勘案して考察してみる。佐賀平野の西部、久保田町を中心に当時の漸移線を推定すれば福島―上新ヶ江から芦刈町の下古賀―西道免―浜中―八枝―牛津町の新屋敷―蒲原を結ぶ線となる。したがってこの線以北は河川沿岸の低湿地や旧河道を除けば、概ね自然陸化の開墾地で、この線以南が有明海の干潟荒野の干拓地と考えられる。

久保田町の開墾地とみられる中副―丁永・恒安―福所には南北に整然とした八筋濠がみられる。この濠割りを条里制の遺構とする説もある。しかし時代的には少し無理で、平安時代以降、条里制の区画割りを参考に構築したのではないかとみられる。当時の嘉瀬川の河口は現在の嘉瀬津の方に大きく蛇行して入江をなし、天平勝宝五年（七五三）中国から鑑真一行が嘉瀬津（鹿瀬）に上陸したと伝承されている。また『平家物語』には「嘉瀬の庄」が三カ所みえ、かなり大きな河口津があったことが想像される。

2 戦国末期の海岸線

自然陸化地の開墾から有明海にむかっての干潟芦野の干拓をはじめての約三〇〇年の歴史を示す戦国時代末期の海岸線については、これまで歴史地理学者米倉二郎、千手正美両氏の有明海の干拓についての論文がある。これによると東方川副町の犬井道―小々森―東与賀町の大野―佐賀市西与賀町の元相応―丸目―嘉瀬新村―久保田町の東久―三丁井樋―芦刈町の新村―道免―永田―戸崎から牛津川を隔てて江北町の江口―野口に続いていた。当時六角川は大きな入江で、牛津川は六角川の支流ではなく、独立河川であった。

現存している慶長年中肥前国絵図や元禄十四年（一七〇一）肥前国絵図から、当時の海岸線の形態が概ねつかむことができる。慶長以前の干拓地域は海抜三㍍～二・五㍍くらいに成長した干潟芦野で、満潮時でも常に干潟が露出するため潟地が固く、したがって高さ二㍍ないし二・五㍍ほどの土堤を築いて干拓が進められたものと思われる。

久保田町における開墾干拓の漸移線は、中副―福島―上新ヶ江線から考えると、約二〇〇年で横江―下金丸―下恒安―永田―下新ヶ江まで干拓が約八〇〇㍍進み、更に約一〇〇年後東久富―西久富―三丁井樋線まで約五〇〇㍍進展が認められる。この進展の速度は筑後川右岸の川副町の進展に比すれば、平均二分の一程度である。

3 松土居の構築

江戸時代、有明海の第一線潮止堤防（俗に潮土居または大土井・金土井ともいう）は佐賀藩の搦方の支配を受けていた。潮土居には松が植えられていたので、松土居とか本土居とか呼ばれ、有明海の風波に対して、佐賀平野を護ってきた。

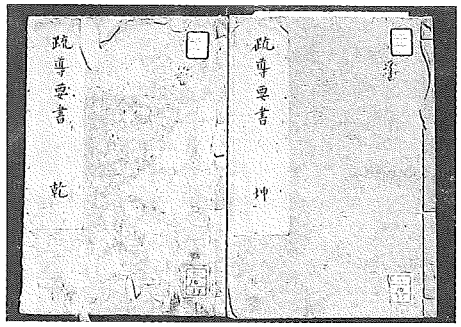
この松土居は筑後川畔の川副町の早津江から、犬井道南端を経て西進し、小々森、東与賀町の大野―佐賀市西与賀町の元相応―嘉瀬町の新村、久保田町の搦の南方を蛇行して、芦刈町の新村東端に至り、牛津川畔に達していた。

この松土居は昭和初年頃までは潮風に耐え天然の音楽を奏でていたが、戦後潮止堤防の意義がなくなったので

伐採されたり、新しい第一線堤防の土取場となったところも少なくない。また所によっては道路となったところもある。この松土居を堺として土居内を一般に揚と呼んで籠名の干拓地が多い。土居外を搦と称して堤防内外はその景観を異にする。久保田町には松土居内側に搦名の集落があるが、これは前面の松土居が正徳三年（一七一三）の嵐に大決壊を起し、元文五年（一七四〇）その補強工事完成後発生した集落であるので搦名を付している。したがって松土居の決壊後約三〇年間は東久富から三丁井樋に至る戦国末期の潮土居（現在の国道四四四号線）が潮止めの役割りを果した時代もあった。搦集落の発生は元文五年（一七四〇）以後と考えられる。個々の集落については別項の『集落編』のところで詳記する。

『疏導要書』によると寛永年間（一六二四―四四）松土居の構築に成富兵庫茂安の指導があったように記され、松土居に八幡社を寛文五年（一六六五）に建立したとある。いずれにしろ大規模の提塘がつくられたのは寛永から寛文の一七世前半期と考えられる。

『佐賀県災異誌』によると、正徳五年（一七一五）、文政十一年（一八二八）の台風高潮の大災害が発生、多くの被害を出したことが記されており、松土居はその都度再築補強されたことがわかる。とくに天明三年（一七八三）佐賀藩に六府方が設置され、その一部局である搦方によって干拓事業が推進されるにおよび、松土居はさらに強化された。久保田ではこの松土居から八〇〇㍍南に明和年間（一七六四―七一）第二の土居が構築された。この干拓は邑主村田氏



が手掛けたもので江戸搦はじめ一三の搦におよび面積五六町五反、完成まで約一〇〇年の歳月を擁した。このほか嘉瀬川河口流域に小規模な玄叔野、中島搦、鯰搦、朝日搦などの小干拓が行われた。ここは麦新ヶ江や福富の大曲りと同じく旧河道地を干拓したもので鍋島藩に属していた。

また福所江（堺川）筋にも、川筋干拓の三丁搦、窪田搦、西分搦、小搦など小規模の干拓があった。

4　明治以後の干拓

明治以後の干拓は松土居外の干拓といえる。慶応三年（一八六七）邑主村田政矩は、松土井の地先に新たな干拓を思い立ったが、幕末諸事多く工事が成就しなかった。その子政匡が父の遺志を継ぎ、有志を説得し、旧柵を修理、塡石、土居を構築、明治二十二年十一月、江戸搦として一二町余りの干拓を完成させた。この完成を記念した「塡海拓地之碑」が江戸集落の遊園地にあるが、これは旧堤塘にあったものである。

昭和九年六月、江戸搦の地先に県営工事として久保搦が着工、同十三年潮止工事を完了、それ以来、内部の道路、水路、橋梁、潮遊など工事を実施、総面積二二八町余歩（二二八㌶）の沃野が出現した。しかし、この干拓

地は戦争の激化に遭って、運営が難行、この事業は農地開発営団に移され、戦後は国営に移管された。干拓に入植がはじまったのは昭和二十二年からで、同二十七年には入植者住宅が一〇〇戸ばかり建てられ、水田の試作が行われ、干拓集落の名で呼ばれた。現在の有明海に面する第一線堤防は、農林水産省の管轄により、昭和四十七年から本格的な防災堤工事（防護面積三三五㌶・防護延長全体四七六二㍍）が実施され、海岸には波消ブロックなどが設置されている。

(四) 久保田の水系

久保田は水に恵まれた水郷の里である。東に肥前のお宝川といわれる嘉瀬川をもち、平野部には八筋濠を中心に縦横にはりめぐらされた堀は米作上不可欠のものであるばかりでなく、戦前までは飲料、用水源として日常生活には欠くことのできぬものであった。

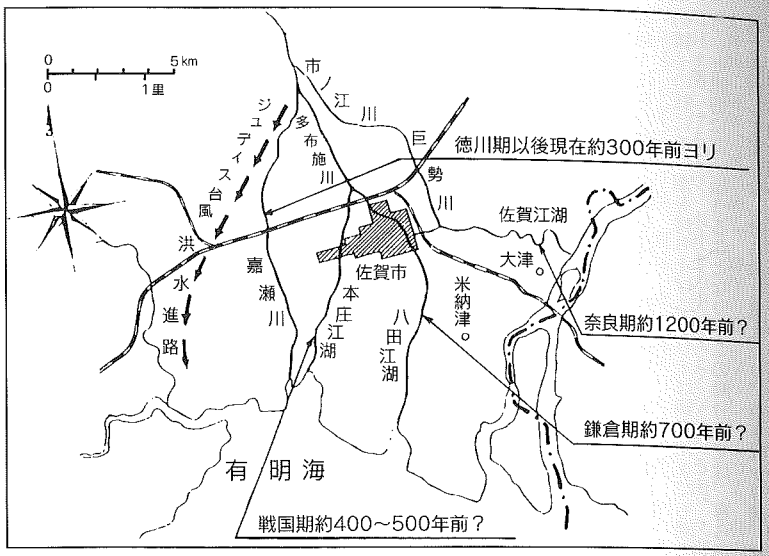
ここで久保田町に係わる「水」を概括してみたい。

1 嘉瀬川の特徴

脊振山地に源を発し、北山ダムを経て、佐賀平野の中央部を南流して有明海に注ぐ。延長五六・九㌔、流域面積二八九平方㌔、一級河川嘉瀬川水系の本流である。この水系には、延長五㌔以上の河川が本流を含めて九河川、五㌔未満の河川は三五河川にのぼる。この川の呼称は、普通大和町にある石井樋より上流部を川上川、下流を嘉瀬川と呼んできた。（現在は川上の頭首工より上流を川上川とする方がよいようだ。）

奈良時代に書かれた『肥前風土記』には、「郡西有レ川、名曰二佐嘉一。川一。年魚有レ之。基源出二郡北山一」と佐嘉川の名でみえる。この川は古来荒れ川で幾度かその流れを変えている。『佐賀県史』によると、（図6参照）奈良期、肥前国府が現在の大和町域にあったころは、今の市ノ江水道、巨勢川、佐賀江川を経て筑後川に注いでいたと考えられる。諸富町徳富の大津は当時の国府津であったという。平安・鎌倉期には多布施川から八田江を結ぶ河道となった。また、戦国期には多布施川から本庄江を結ぶ河道になり、さらに江戸期のはじめ現在の河道になったと考えられる。昭和二十四年のジュディス台風では大和町川上のすこし下ったところで右岸の堤防が決壊し、佐賀平野を西南に奔流

図6　嘉瀬川河道変遷図



した。このように河道の西進傾向がみられるが、それは筑後川の堆積作用による平野東部の地盤の高まりによるものと思われる。この荒れ川は近世初期の成富兵庫茂安以来、その改修が取り組まれてきた。この流域は景勝の地で、中上流部は県立自然公園の一部をなしている。

2　久保田に係わる嘉瀬川

(1)　疏導要書にみえる嘉瀬川

佐賀藩士南部長恒（一七九一―一八五九）の行った河川の研究「疏導要書」はよく知られている。本書は肥前の大小六〇数河川の調査を行い、水の深さ、水の量、川副、川の長さを実測したほか、井樋や堤防のことなど、河川工学的な考察を加え、図面も加えられている。この本は天保五年（一八三四）鍋島直正に献上されたものである。嘉瀬川の場合石井樋のことがよく引用されているが、本町に係わる下流部の部分を引用してみる。

〃嘉瀬川の下新川というは、のちに掘りたる川ゆえ名づけたるなり。もと江筋にて嘉瀬津というも、江筋のときの名にて往還筋という。舟の往来も自由にして繁昌の津なりし由。このころまでは嘉瀬の南裏より天草江筋まで入江にて、潮の差し引きあり。いま往還に石橋のあるところ、前の天草江の舟通しにて、それより南裏に通り、徳仏村の東、これを得仏林という。右の林より麦新ヶ江を右得仏の境を通り、西に巡り、また東南に出づる。それよりまた福富村を西へ巡り、南久富村の境に出る。凡て二曲の鑓子の鉉にて、潮を持ち上げるより上は鍋島川までも潮の干満ありし由。森川（森田？）の渡に鷺の見ゆるとき、渡れば怪我ありしと世俗に言い伝うることなり。この時分までは、専ら舟渡にて、殊にこの辺に渕ありて深かりしかば、怪しきものこのところに住居して災をなしける故と見えたり。百年ばかり前、享保の末まではこの森川は小城の往還なりけれども、川上川の水勢強く、こと更洪水の節、この二曲り鑓子の鉉にて引き落す水を支ゆる故、水吐きの便利悪しく、水溜はもちろん、嘉瀬、久保田の土井筋に毎年切渡出来て、耕作の憂となりしによって、右の曲り徳仏の南より、久富の東までを掘り切り、直江になして、南海に引き落しけるより、水吐きの便利はよくなりたる由。久富村の境にある曲りは、享保の末堀切りになり、麦新ヶ江の林は、それより二十年ばかり後、寛延三年に堀切りたるとぞ。何れも久保田より願いたる由なし。しかし右の如く二つの曲りの潮持を取りのけしより、潮の差し引き速かになりて、潮時の満ならでは嘉瀬の橋までは上らず、それ故に舟の往来も自由ならず、嘉瀬の津は衰微したりと。この二つの曲りは、いまは古江湖と唱えて、僅かばかりの堀筋あり、云々〃

これによって享保十五年（一七三〇）とそれより二〇年ほど後の寛延三年（一七五〇）に下流部の蛇行（曲り）を開削（掘切）したことがわかる。開削前は嘉瀬橋から草木田・中副の龍宮社前、土井の古賀の東側を八の坪、大立野へと流れていた。（これを古川という。）

この開削は洪水の排水を容易にし、堤防を護り、水害の被害を少なくするための工事であったが、反面川の水勢が強くなり、また潮の差し引きが早くなったので、満潮時でも潮は嘉瀬橋までくらいしか上がらず、舟の往来が自由にならず、嘉瀬津の湊が衰微することになった。

(2)　嘉瀬川下流の堰

本町の上流には有名な石井樋（大井手堰）、森田堰、萩野堰など農業水取得の堰があった。本町の堰は最下流の堰で、旱天が続けば用水不足を生じていた。しかし本町には八筋濠（東から金丸濠、口の坪濠、東長永濠、地蔵濠、三ノ坪濠、中ノ坪濠、西長永濠）があって、一ヵ月くらいの旱天が続いても凌げるだけの水源があった。

藩政時代には交易の川舟が徳万宿、福富宇治端、久富番所付近まで航行していた。各堰には舟運のための野越

がつくられていたので、相当の溢水漏水があり、その水の便宜を得ていた。しかし明治以後、車力や馬車などの発達で、舟運がすたれ、各堰の野越が閉鎖されて、流水する水量が次第に少なくなった。

本町の一番重要な用水取入れ口は徳間の禅門井樋で、藩政時代から戦後まで井樋番がいた。またその南には水取り堰があり、この二つの堰が町内に嘉瀬川の清水を運んでいた。

現在佐賀西部広域水道企業団が設立され、佐賀西部の広域にわたる水道水を供給する事業が実施されている。

(3) 嘉瀬川筋の渡場

昭和四十五年まで嘉瀬橋から下流有明海までの約四キロの間、橋がなく、その間福富の宇治端渡と新田の八の坪渡しがあった。

宇治端渡しは対岸の嘉瀬新村に渡り、佐賀に通じる重要な渡しであった。満潮時には小舟で、干潮時には両岸から差しかけてあった桟橋に、中央に小舟が連結されており、渡賃が必要だった。この渡しがいつごろ開設されたか不明だが、元禄元年（一六八八）窓乃梅酒造が創業されたころ、すでにこの渡しはあったと伝えられている。

この渡しは下流、久富東に昭和四十五年五月久保田橋が完成したために取止めとなった。

新田の八の坪渡（通称麦新ヶ渡し）は、八の坪排水樋管の堤塘下から対岸の嘉瀬村一五（現森林公園）に通じる渡しであった。

ここは嘉瀬川の大曲りあったところで、嘉瀬川の直江改修にあい、宝暦五年（一七五五）頃開設され、渡し守がいた。渡しは満潮のときは舟を利用し、干潮の時は木の杭をH型に組み、幅四〇～五〇センの板が渡されていた。

中央にはダンベと呼ばれる小舟が備えてあった。大立野から魚を運ぶ人や芦刈方面からの利用者も多かった。

昭和三十七年に得仏橋（農道橋）が架けられ、同四十三年から県立森林公園が造られ、得仏地区に県営みどりの球場がつくられ、平成十三年、久保田みどり橋が完成、現在では、昔渡しがあったことを知る人も少なくなっている。

3 堀と江湖

まず「堀」はどうしてできたか、それにはさまざまな説がある。その成因を分類してみる。

① 佐賀平野の干潟時代の澪（江湖）およびその支流や旧河道が堀として遺存するもの。

② 大化の改新後の条里の遺構および、その後、潅漑排水用として掘削したもの。

③ 中世豪族が防盗防敵用として設けた環濠。

④ 集落の宅地造成の土取場として掘開きし、日用水源、潅漑排水源として利用するもの。

⑤ 干拓堤防の土取場として掘開し、兼ねては干拓の遊水地として利用するが、後には潅漑水、集落の日用水源の役割を果すもの。

①は自然発生的成因であるが、②以下は人為的成因といえる。

本町の八筋壕は条里線と思われる整然とした濠があり、幅、長さ、面積なども一定の基準によって作られている。濠の中には条里の坪名を示す三の坪濠、中の坪濠、十七坪濠、口の坪濠などが条里制によって開削された堀

割りともみられるが、自然地理学的土地造成の観点からすれば、まだ奈良時代、八条濠一帯は干潟地帯ではなかったかと推定できる。したがって平安時代以後、完全に陸地化後、条里制施行の方式に従って、整然とした堀割りが計画施行されたのではないかとみられる。

戦前までは飲料、用水源として日常生活上堀は貴重な存在であった。

次に「江湖」である。江湖は河川の末流が澪を形成し、これを俗に江湖と呼んでいるが、今日佐賀平野を流れる河川は、かつて干潟時代、平野を流れる江湖であった。江湖は単に「江」と称して、福所江、本庄江、八田江、佐賀江湖、巨勢江湖などの名称がその生成の由来を物語っている。

江湖は元来有明海に注ぐ感潮河川であるから、満潮時には海水と流下した淡水の逆流現象がみられ、この逆流する淡水を俗に「アオ」と呼んでいる。この逆流現象は、河川を水工的に堰止めることなく、全く自然に放置する時は、概ね海抜五㍍線近くまで逆流する。この五㍍線を北限とする牡蛎殻層を含む堀が分布して、かつての有明海の海岸が想定できる。概ね四㍍付近に井堰を設けて満潮の遡流を防ぎ、流下する淡水や逆流する「アオ」を堀に貯水して、潅漑に利用し、下流部においては潮汐の干満を利用して舟運の便を計った。

芦刈町との境界をなす堺川（福所江）は、小城郡三日月町の島溝で合流する嘉瀬川、祇園川の水を排水する東芦刈川を源としている。江戸時代までは他の江湖と同じく蛇行部分が多く、福所まで舟が遡っていたが、明治以後、排水を早めるために屈曲部の掘替えが行われた。

大正十一年（一九二二）久保田駅近くに黄板紙工場が進出、汚水問題がしばしば起った河川としても知られている。

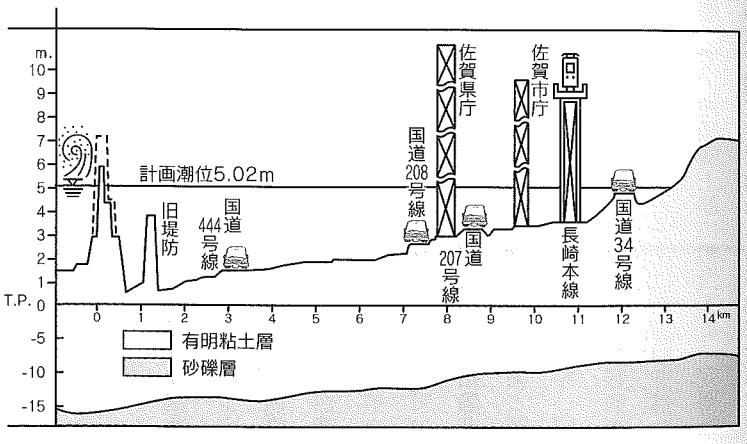
(五) 地形・地質・土壌

1 地形

佐賀平野縦断図（図7）をみればわかるように、平野部は有明海の堤防の高さや潮位線から考えて、いま仮に堤防が決壊してなくなったとすると、海水は現在の佐賀県庁、本町の場合は国道二〇七号線付近まで浸水することになる。つまりこの浸水地域の大部分は干拓によって生成された新しい土地柄といってよい。

本町はその中でも有明海に面する地形は人工による堆積地形で、干拓堤防によって形成されている。普通干拓工事を考える場合、大潮時の最高位と小潮時の最低位の間の潟地が対象となるが、本町の場合は干潟面は千分の一位のゆるやかな勾配（傾斜）を示しているが、肉眼で高低を判断することはできない。干潟の発達は泥土や潟の堆積作用ばかりでなく、潮の干満の伸長とも関係深い。詳細な微高地はかつて自然堤防や砂州があったところとみられる。ただ嘉瀬

図7　佐賀平野縦断図



川や堺川の堤防は、内部の平地を護るため、三〜七㍍ほどの土盛りをみせている。

2 地質

佐賀平野の軟弱地盤については、佐賀大学を中心とする低平地学会の地道な研究や、また佐賀県地質調査協会の真摯な調査活動によって科学的な解明がなされてきている。

本稿は岩尾雄四郎・川添宏市論考の「佐賀平野における有明粘土層と火山灰層の分布」（佐賀大学農学部付属浅海総合実験施設研究紀要№1）。岩尾雄四郎・下山正一論考「佐賀平野の化石谷」などを参照させていただき、まとめたものである。

これによると図8のように佐賀平野と北部有明地域においては東西性二本の大きな断層が存在するとされている。佐賀平野部の北西部に端を発する大町断層は佐賀平野の中部を東北東方向によぎっている。更に多良岳の北方からは北東方向へ向けて柳川断層が走っている。両断層の方向はほぼ平行であり、その間が北有明海地溝と呼ばれる陥地で、本町はその中に包含される。図8の二本の地質断面図（Ⅰ〜Ⅰ′・Ⅱ〜Ⅱ′）の地質凡例を参照し判断してほしい。

町域の大部分を覆う〝有明粘土層〟のなりたちから眺めてみる。

この名前は「完新世の高海水準のもとで有明海域に堆積した海成粘土層」で、沖積層上部に相当する。完新世は最終氷期が終わってから現在までの約一万年間の温暖期をいう。海水準は氷期には氷河になった水の分だけ世

界的に下降し、温暖期には上昇する。有明海も氷期には干し上がっていたわけで、現在は海進状態にある。有明海粘土層は、この浅海の堆積中の最新の地層として定義されている。

図8による地質断面図によると、有明海粘土層は最大で約二五㍍、本町関係では一〇㍍〜一五㍍の層厚を持つ粘土〜砂質シルト層で青灰色を呈し貝殻を交えている。なお、この層は山麓に近づくにつれて薄くなり、砂礫質になって消滅する。

有明粘土層は土木工学上も有名な軟弱地盤のため、高層建築をつくる場合、コンクリート支柱をより深く、阿蘇火砕流堆積物まで打ち込んで建設される。この火砕流は約七万年前に阿蘇山がカルデラを形成したとき、超大規模の噴火で噴出した軽石が焼土となったものである。

図8によると白石平野方面に有明粘土層が厚いことがわかるが、これは有明海が反時計回りの沿岸流が存在するため、粘土が西側に運搬され堆積された結果とみられている。有明粘土層の粒度組成が、筑後川河口から白石平野、諫早平野にいくにしたがって細粒になっている。

次に阿蘇火砕流は建築物の基礎として主に使用されている。本町の場合北部で約二〇㍍、南部で約三〇㍍くらいのところに火砕流層があるので、学校舎程度の建築にはそこまで基礎を打てば耐える地盤であるとみられている。

よって、有明海の北に広がる佐賀平野の地質に、完新統によって埋没した化石谷があることが明らかになり、これまで局所的な視点でとられてた地層の大略的な分布がわかってきた。

次に表5に揚げたものは、昭和四十五年五月、思斉中学校体育館新築工事のために地質調査された試錐孔によ

地　質　凡　例

地質時代		模式柱状	平均層厚	地質名	分布状況
新生代第四紀	沖積世	Ac2 / As3 / Ac2 / As2 / Ag / As1 / Ac1	10〜25m	有明粘土層	●シルト〜シルト質粘土—(Ac2) ●レンズ状に砂層を挟有する—(As2, As3) 鹿島市街 ……10〜13m 白石・福富 ……20〜25m 芦刈・久保田 ……12〜15m 佐賀市街 ……10〜13m 諸富 ……15〜20m
			5〜15m	島原海湾層	●砂層主体—(As1) ●局部的に砂礫(Ag)，粘土(Ac1)挟有する
	洪積世	Vs	0〜10m	八女粘土層(阿蘇火山灰)	●軽石混じり火山灰質砂層—(Vs) ●諸富・有明町でも先滅する
		Dc / Dsg / Dc / Dsg	—	未区分洪積層	●砂礫・砂(Dsg)，粘土(Dc)の堆積サイクルからなる ●山体（基盤岩）近くでは傾斜するものの，ほぼ水平に近い堆積状況

浅い　深い　深度(m)　5 10 15 20　等深線(m)　I　I′　地層断面線　：火砕流堆積層が欠如した化石谷

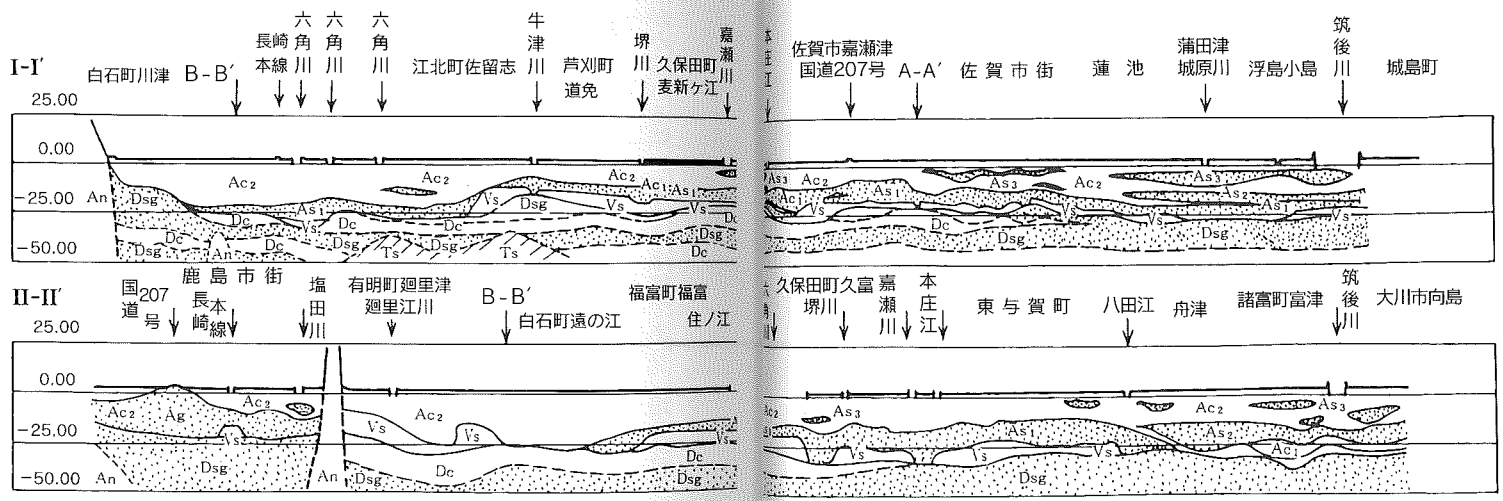
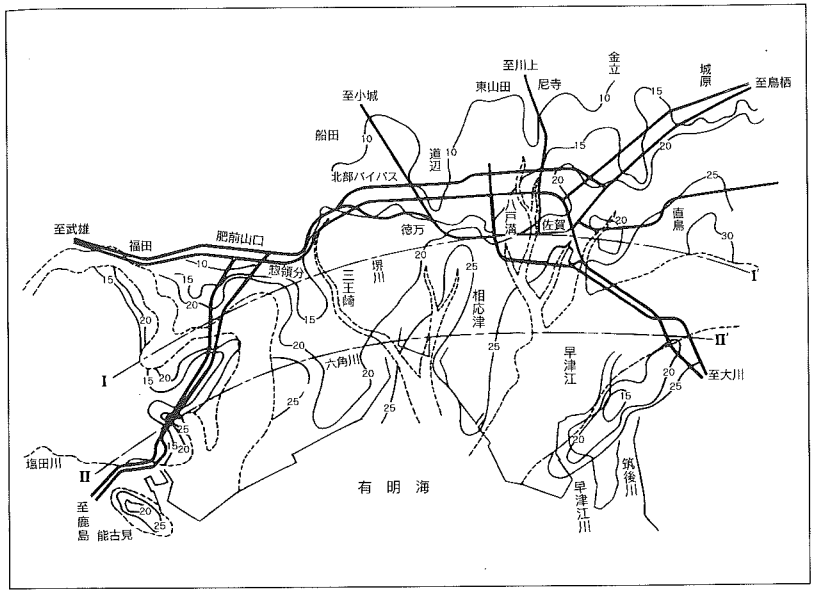


図8　地質断面図の位置と有明粘土層・火砕流堆積層の分布



る柱状図である。この中に示された地質名の「シルト」とは、別名「沈泥」といい、土の中に存在する粒子の直径が〇・〇七五ミリから〇・〇〇五ミリまでのものをいう。粒子の大きさは砂と粘土との間にはいるもので、成分は岩石の粉末であるため母岩と同様である。シルトは乾燥しても粘土のように堅くならず、水を加えてもあまり粘らない。表には地下二五メートルまで示されているが、これより深層は概ね砂と粘土の互層となる。二五〇メートルまでは沖積層で、それより下五〇メートルは新第三紀層。その下二〇〇メートルくらいは古第三紀層になるといわれている。

3 土壌

佐賀平野北方の山麓部は一般に土性が粗く、砂壌土～壌土で下層に礫を有し、砂礫質土壌に属するものが多い。JR長崎本線以北は灰褐色土壌で、土性は埴壌土～埴土で南部に比してやや粗く、水稲の生育はやや秋落的傾向を示す。長崎本線以南で江戸時代までに干陸化された地域は、細粒灰色土で地下水位は低い。全層が2：1型の粘土鉱物からなり、柱状構造がよく発達している。この土壌は保肥力や養分の供給力が高く、良質米生産の中心をなしている。夏期には灌漑用のクリークの水位が高くなるため透水性が悪くなり、これが収量停滞の一因をなしている。近年は圃場の整備によって用水路と排水路が分離されるようになって、その弊害が少なくなってきた。

明治以降の新期干拓地は細粒グライ土で、保肥力および養分供給力は高いが排水が悪く、七〇センチ前後のグライ層が出現する。しかし、近年暗きょによる排水工事が行われ乾田化が進んでいる。

干拓地の土壌は、干陸当初は作土直下から青灰色をしたグライ層がみられる強いグライ土壌であり、塩分含量

表5　地質柱状図

思斉中学校体育館工事地質調査(昭和45.5)

標高 M	深度 M	地質名	色	硬度	観察
-1	1.00	表土	灰褐	柔かい	粘土にてよく乾燥している
2	1.45	粘土	灰茶褐	柔かい	非常に粘性のある粘土
3 4 5 6 7 8 9 10	9.45	シルト質粘土	青灰	柔かい	所々細砂を薄く挟む 微細貝殻片をわずかに含む
11	10.45	粗粒砂	暗灰	柔かい	全体的に含水量多く軟弱
12 13	13.15	砂質シルト 粗粒砂	灰緑	ゆるい	シルト分を混え金雲母を含む
14 15	14.45	粘土混り 粗粒砂	青緑	堅い	砂は粗粒でわずか粘土を混えやや粘性あり
16 17 18	17.45	粗粒砂	淡褐	中位	主として粗砂よりなる
19 20	19.45	中粒砂	茶褐灰	中位	19m付近で褐灰より茶褐に変化
21 22 23 24	24.45	火山砂礫	暗褐 ～ 灰褐	中位 ～ 密な	礫は軽石状、砂は火山灰、火山塵で所々風化しシルト化、粘土化している
25 26	25.45	砂質粘土	灰褐	堅い	よく締まっており固結状

も高い。しかし、水稲の作付回数が多くなるにしたがってグライ層は低下し、同時に脱塩作用も進むのが一般的である。

これらの土壌を研究するためには、利用別、地目別、況積層、玄武岩、火山灰など多種の土壌別に分類する必要があり、通常農業を中心に考える場合、深さ一㍍の土壌断面について詳細な科学的調査が行われ、「母材堆積様式がほぼ同一と考えられるものを土壌統と名づける」。佐賀県内には佐賀統、川副統、北多久統などいくつかの土壌に分かれている。これらは農林省農業技術研究所科学部「土壌統設定基準および土壌統一一覧表」などを参照した。

これによると本町の土壌は佐賀統に属している。図9による土壌柱状図の内容は次のとおりである。

第一層　〇～一二㌢腐植を含む黄灰土Ｓｉｃ、ち密度一七、角塊状構造で可塑性、粘着性とも大、湿りはやや湿、膜状の鉄の斑紋あり。

第二層　一二～三四㌢黄灰土Ｓｉｃ、膜状、雲状斑すこぶる富む。結核すこぶる富む。大角塊状構造、細孔富む。ち密度二二、可塑性大、湿りは湿。

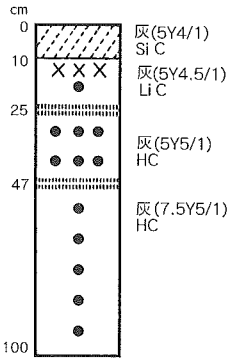
第三層　三四～六〇㌢黄灰土Ｌｉｃ、結核すこぶる富む。大角柱状構造、細孔含む。ち密度一四、可塑粘着強、湿り湿。

第四層　六〇～八二㌢黄灰土Ｌｉｃ、結核及び膜状斑含み、脈状あり。大角柱状構造細孔あり、ち密度一一、可塑粘着性強、湿り湿。

第五層　八二㌢以下、灰色Ｈｃ、大角柱状構造、ち密度七、可塑粘着性強、湿り潤。管状結核あり。

なおこの土壌利用の特徴は、主に水稲、麦、たまねぎなどである。土壌改良としては、一般に養分状態に恵まれているが、塩基、珪酸、燐酸に乏しい所は珪酸苦土石灰、溶燐を施用する。また施肥は保肥力が大きいので、元肥施用が過多にならぬよう留意する必要があるといわれている。

図9　佐賀統土壌図



(六)　気　象

1　気候の概要

久保田町は地理的に佐賀地方気象台と気象条件をほぼ同じにしているので、佐賀地方気象台の資料を中心に四季の変化を眺めてみたい。

本町は有明海に面し、気温はきわめて温暖で、町内には亜熱帯植物である楠の巨木も多い。人間が暮らしやすい快適な気候は、気温一五度～二〇度、湿度六〇～六五％といわれる。昭和五十八年から平成八年までの平均気温、平均湿度、降水量を表6にした。これをみてもわかるように一六度内外である。この温度は東京より一度、札幌より八度高く、那覇より六度低い平均気温に当たる。年降水量は全国平均の一六〇〇㍉よりやや多い。湿度は七三％位で、快適といわれる湿度に比べると確かに高いが、日本の平均湿度からみて、必ずしも多湿とはいえない。しかし、佐賀平野部は海陸風の影響が少ないため、盛夏期、とくに夜間むし暑いのが欠点で、寝莫薦(ねござ)が用

いられたのも、生活の知恵といえる。

佐賀における いろいろな気象要素を五日ごとに八〇年間平均した図10（山崎道夫編『佐賀の天気』所載）によると季節の変化がよくわかる。

表6　平均気温・湿度・降水量一覧

区分／年次	平均気温			平均湿度	降水量
	平均	最高	最低		
	℃	℃	℃	%	mm
昭58年	16.3	21.1	12.3	71	2,109.0
59	15.9	20.7	11.8	70	1,331.0
60	16.3	20.9	12.4	73	2,134.0
61	15.7	20.6	11.6	73	2,231.5
62	16.3	21.2	12.2	74	2,307.5
63	15.9	20.9	11.8	73	1,644.0
平元年	16.7	21.7	12.6	72	1,770.5
2	17.2	22.1	13.1	73	1,936.0
3	16.5	21.1	12.7	74	2,433.0
4	16.5	21.4	12.4	72	1,665.0
5	16.0	20.6	12.0	73	2,566.0
6	17.3	22.4	12.9	70	1,013.5
7	16.0	20.9	11.7	72	1,856.5
8	16.1	20.9	11.7	70	1,597.0
8年 1月	5.1	9.8	0.3	6.2	38.5
2	5.1	9.5	0.9	6.2	41.5
3	9.4	14.0	5.0	7.9	152.5
4	12.1	17.8	6.5	8.7	94.0
5	19.5	25.3	14.0	13.9	85.0
6	23.7	27.4	20.6	23.1	489.0
7	27.2	31.6	23.7	26.7	108.5
8	27.8	32.5	24.2	26.5	331.5
9	23.7	28.5	19.4	20.0	74.5
10	18.5	23.7	13.7	15.2	45.0
11	13.5	17.6	9.3	11.5	47.5
12	7.3	12.7	2.2	7.5	89.5

2　四季の変化

一月は平均気温五度程度で、年間の最寒期である。大陸の高気圧が発達し、北西の季節風が吹き続き、脊振、天山に白雪をみるようになる。夜は渡り鴫（かも）の鳴き声が闇の静けさを破る。しかし、真冬でもいくらか三寒四温の動きがあって凌ぎやすい。雨量も日照時間も年間で最も少ないが、湿度はかなり高い。

二月の中旬から気温が上昇、梅が花を咲かせる。下旬にはだいぶ陽気になるが、時には大陸から黄砂が飛来して、空が曇ることがある。

三月になると大陸高気圧もしだいに衰えて、天気の変化もはげしく、気温も上昇、春雨のため、樹々は新緑の芽をのぞかせる。俗に「木の芽ながせ」などと呼んでいる。「暑さ寒さも彼岸まで」の諺のように、三月下旬になると、人々の衣装も春めいて、桜も満開となる。四月になると平均気温も一四度を超し、春雨に花曇りの季節となる。初旬にはツバメが飛来、吉野桜も満開、

図10　佐賀における季節の移り変り

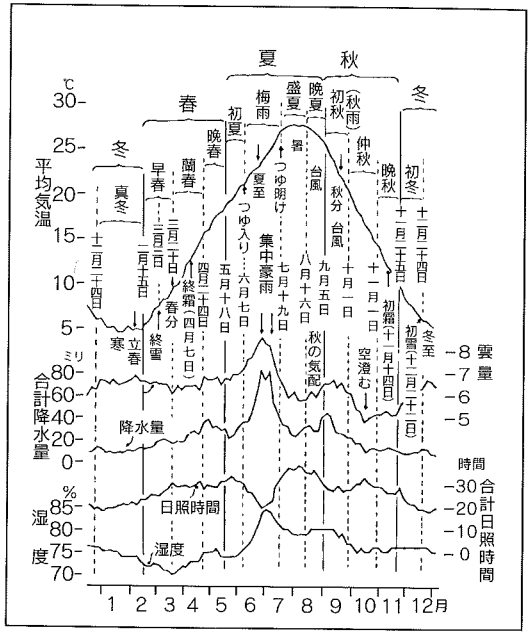


表7　佐賀市周辺の気象と生活表

「佐賀県の天気と天気のことわざ」による

月	1	2	3	4	5	6
日	9 20 27	4 21	5 21	7	6	11 13 22
暦と気象	積雪の初日 大寒 平均最低気温の最低	立春 積雪の終日	雪の終日 春分結氷の終日	霜の終日	立夏	梅入り 佐賀のツユ入り 夏至
日		1 28	3 19 26	2 6 23	12 16	
動植物季節		ウメ開花 ウグイス鳴き始める	モンシロチョウ出る ツバメ来る ソメイヨシノ開花	イチョウ発芽 ソメイヨシノ満開 ヤマツツジ開花	ミカン開花 ヘイケホタル出る	
日			13 14 18 29	5	21	8
生活季節			コタツ使わない 外とう脱ぐ ストーブたかなくなる 冬服脱ぐ	火ばち使わなくなる	カヤのつり始め	夏服着る

月	7	8	9	10	11	12
日	15 23	8 14	1 23	24	8 16	1 10 22 23
暦と気象	ツユあけ 大暑	立秋 平均最高気温の最高	二百十日 秋分	霜降	立冬 初霜	初氷 天山山頂冠雪 冬至 初雪
日	21	4	30	14	15 30	29
動植物季節	アブラセミ鳴く	ツクツクボウシ鳴く	コスモス開花	ツバメ去る	イチョウ黄葉 イチョウ落葉	スイセン開花
日	5		8 27	3	9 22 25	5 7 8
生活季節	水泳始まる		水泳終わり カヤのつり終わり	夏服脱ぐ	火バチ使い始める 冬服着始める 手袋使い出す	コタツ入れる 外とうを着るる ストーブたき始める

（数字は昭和28～35年の8年間の平均）

有明海は潮干狩の船でにぎわう。中旬には麦の穂が出る。

五月は新緑の季節で、青空に鯉のぼりが泳ぎ、平均気温も一七度を超す。日照時間も毎日六時間くらいとなり、下旬から六月初旬にかけて麦の収穫期となる。

六月は平均気温も二二度と上がり、湿度も八〇％以上となる。中旬ころから梅雨となり、雨量も一〇〇㍉を超える。農家では田植えの季節となり、戦前までは「猫の手も借りたい」といわれていたが、近年は機械化が進んでわけなく終わる。梅雨の末期には集中豪雨となって、大きな被害をだすことがある。

七月は上旬まで梅雨が続く、陽ざしも強くなり、最高気温は三〇度を突破し、湿度は八〇％を超え、好天の日には入道雲が出る。雷雨を伴う夕立がしばしばある。月末は酷暑となるが、子どもたちには楽しい夏休みの季節となる。

八月は小笠原付近の高気圧が固定し、連日晴天となり、日照時間も最大となる。炎暑いよいよ耐えがたく、子どもの水遊びのシーズンでもある。またときには干天続きで灌漑水に悩む年があるかと思えば、台風襲来による豪雨による大水害を起こした年も少なくない。昭和十四年の干害、二十四年、二十八年、四十七年の水害などは主なものである。下旬には佐賀名物の菱が出はじめる。

九月は平均気温は二三度に下がるが、雨量は年間で、梅雨期の六月に次いで多い、農家の恐れる二百十日、二百二十日前後は稲穂の出はじめたころで、台風と暴風雨に見舞われることが多く、しばしば大きな被害を被ったことがある。下旬は気温も下がり、彼岸を迎えるころになると曼珠沙華（まんじゅしゃげ）の花が咲き、朝夕はめっきり涼しくなる。

十月は平均気温一七度、雨量は九月の半分に減り、移動性高気圧が日本をおおい、一年中で一番天気がよい。

コスモスの花が咲き、蜜柑や柿、栗など秋の果物が色づき、秋祭の太鼓や体育祭などが各地で実施される。

十一月は平均気温一二度と下がり、前月と同じく晴天が多いが北寄りの風が強くなり、田圃では稲刈りがはずみ、稲小積みがみられるようになる。今日ではコンバインの収穫で稲小積みはほとんど見られなくなった。下旬は樹木の紅葉がはじまる。

十二月は平均気温七度に下がり、北西の季節風が強い日はかなりの寒をおぼえ、中旬には初雪をみることが多い。雨量は一年中で最も少なく、月間六〇ミリ内外である。年中で最も日の短い冬至は十二月二十二日ころで、冬至粥や冬至南瓜を食べたり、柚子湯に入って無病息災を願う習慣がある。下旬にはしばしば酷寒が来ることがある。寒波の襲来は周期的で三寒四温に似ている。有明海周辺の堀割りには鴫の群れがみられる。

(七) 天変地異

本町は東に嘉瀬川、西に堺川をもち、南は有明海に面する極めて、水害が起こりやすい土地柄である半面、水源である山地から遠いため、干害にも弱い地域である。幸い八筋壕を中心とするクリークが縦横に走って水の貯溜量が多いため、これまで大きな干害被害はでていない。

水害の原因は山地に降った大量の雨に川の堤防が破壊され氾濫することが多かった。また一つには有明海の潮汐によって、水位が高くなり、嘉瀬川や堺川の水を押し上げ、山地から流れてくる水をせきとめる形となるため、川水は堤防を破壊したり、あふれ出して洪水となる。一方、有明海に面する海岸には堤防が築かれているが、海水の侵入を恐れて、排水の井樋が少ない。そのため氾濫した洪水は、堤防の内側に溜まって排水が不可能になり、稲作などに大きな被害をもたらすことがあった。

洪水は六、七月における梅雨前線の停滞による連続豪雨と、八、七月における台風に伴う集中豪雨によることが多く、農村である当地域は水稲の被害が甚大であった。

戦後だけでも昭和二十二年九月のカスリーン台風、二十三年九月のアイオン台風、二十四年八月のジュデス台風、二十八年六月の大豪雨、二十九年九月のマリー台風など応接にいとまないように襲来して、各地に大災害を与えた。

ここでは本村で最も被害を出した大正三年（一九一四）の高潮災害と昭和二十四年のジュデス台風をとりあげてみた。

大正三年八月の高潮災害

戦前では大正三年（一九一四）八月二十日から二十六日までの一週間、有明海沿岸を襲った高潮災害は佐賀県はじまって以来の大きな被害を出した。当時潮汐の進捗状況などを調査する観測所もなく、これを予想することはできなかった。

『杵島郡高潮災害志』に次のようにみえる。

大正三年八月下旬は、盆潮の時期に際り、而も例年に比して更に一層の大を加へ二丈一尺乃至二尺に達し、加ふるに東風絶えず吹き荒みしかば、沿岸の民衆は危惧の念を懐きつつ徹宵新搦の堤塘防禦に努めたりしも、廿五日高潮侵入当時は、更に四五尺

の増大を来し、実に二丈六七尺の差を見るに至れるが上に、暴風之を煽るありしかば、又如何ともすべからず未曽有の惨害を生せしなり（中略）

次表は各郡別々の精密なる調査を遂げたる者なれば、其の数字の確実なるは、固より其の所なりと雖も損害価額に至りては、其の見積の標準を異にする者あり

と記されている。本町の場合詳細な記録が残っていないのではっきりしないが、先の『久保田町史』によると

県下各郡損害比較

種別	杵島郡 員数	杵島郡 損害見積	佐賀郡 員数	佐賀郡 損害見積	小城郡 員数	小城郡 損害見積	藤津郡 員数	藤津郡 損害見積
人 死亡	七人	—	一人	—	一人	—	七人	—
人 負傷	二〇		一戸		六戸		四戸	
家屋 流失	一九七戸		一七戸		一三		三五	九、六〇〇円
家屋 全潰	二三	四〇、四二六円	四一	?	六三	二七、九四五円	二三	五、二五〇
家屋 半潰	一七七		八五		六一		一、四九六	四、七八〇
家屋 浸水	一、一七一		一、六〇九		六一		一、四六七町	七、四六〇
土地 田	二、九八九二町	七七六、一六七	一、七二五四町	四六二、八四二円	三八六町	二七五、〇六六	一、一九一一	二九三、四〇〇
土地 畑	三八間	一二、六二九	六、八九一間		八二一五五間		四、三五七間	三五七、三六〇
堤防	三三、二六六	一五六、四五五	一九八	—	三、二八五	—	六、六三一	九七、九三八
道路	一、三三七一	二、一八一	—	—	六〇ケ所	四三、九四九	一七ケ所	八七、七六三
橋堰	二七二七	一、四八三	—	—	五	—	九五殴	一〇、二三二
船舶	三九殴	一、七七〇	—	—	—	一、三〇〇	—	四、七五〇
其他	—	一五六、四五五	—	—	—	二五	—	—
合計	—	一、一四七、五五六	—	四六二、八四二	—	三四八、二八五	—	八七八、五三三

「杵島郡高潮災害史」による

次のようにみえる。

日独開戦、わが村からの応召兵士歓送のまっ最中、大正三年八月二十五日、不意に高潮の来襲があった。被害は堤塘欠壊のために、搦部落の東新地、西新地の八十余町歩の稲田が最も甚大であった。出穂前の稲は一面に赤稲田と化し、その被害は今古未曾有とまで言われた。堤塘欠壊状況は東新地の東南、朝日搦の村責管理の堤塘を隘水した高潮が、県責管理の堤塘約五十米を欠壊させたことにある。そのために潮は搦内にとうとうとして流入した。この流入した潮は福庄江筋にある常設の排水桶管では到底排水不能となったので、堤塘の一部を切断して排水のやむなきに至った。本村の被害の詳細は記録がない。佐賀郡内での最大被害村は南川副村で、収穫皆無田三七七町七反。減収高一一、二五六石。ついで東与賀村、久保田村、大詫間村の順とある。

また同年九月五日、久保田村久富勘左エ門井樋が、午前一一時満潮の際、仮締切り五か所を崩壊、水田七〇町に浸入被害を出した。その後、大正六年八月四日、台風による高潮が本村を襲い、久保田村大字久富搦南堤防を二間半決壊、浸水田一〇町歩、二戸床下浸水、損害五〇〇〇円（佐賀新聞）とみえ、本村の高潮対策、堤防の強化がはかられることになった。

このほか『佐賀新聞』などにみえる戦前の災害記録を記してみる。

○大正七年七月十一日～十三日　風水害、久保田村　瓦製造工場一棟倒壊、未焼の瓦一万枚破損

○大正十五年九月七日　豪雨　木島溝堤塘決壊、久保田駅浸水

○昭和二年九月十日～十四日　豪雨　嘉瀬川氾濫、各所床下浸水

○昭和五年八月十二日　暴風雨　久保田学校校舎倒壊

○昭和十四年七月　県下大干ばつで、各地で雨乞祈願が行われ、田植えがおくれた。本村では八筋濠などのクリークのおかげで、他村のような干ばつ被害はなかった。

○昭和二十年九月十七日　枕崎台風、大被害、反当収量一石五斗を下り明治三十三年以来の大減収といわれた。

昭和二十四年八月　ジュディス台風被害

ジュディス台風の中心が佐賀近くに接近した八月十六日には風力は弱まり、最高秒速一五㍍。瞬間最高でも二一・六㍍に過ぎなかった。しかし猛烈な降雨に伴い十六日一六時から十七日中豪雨が降り続き、一時間最大四〇・六㍉、一日最大二七五・九㍉、十五日から十八日までの四日間の総雨量は四九五・五㍉で、佐賀測候所開設以来のレコードであった。当時の台風の経路図、雨量分布図、県下各地の雨量を『佐賀県災異誌』（第一巻）より図11と表8の形で抜粋してみる。

県下各地の雨量の中で古湯観測の七六六・一㍉が最も多い。この豪雨は台風の中心が平戸の西方に停滞し、佐賀では南々東および南風が卓越したときに起った。この風は有明海からまっすぐ佐賀平野に吹き込んでくるので、有明海正面に多量の雨を降らせた。とくに脊振、天山山塊と多良岳地域では六〇〇㍉を超え、前者の一部では七〇〇㍉を超えた。この台風で県下の死者九五名、負傷者三七六名、住宅被害四万九七五四戸であった。本村にとっては、これまでにない最大の被害を受けた。

なお、この年は佐賀県はじまって以来といわれる気象災害最悪年であった。ジュディス台風来襲以前の六月二十一日、デラ台風が本県をかすめ、死亡者一名、負傷者三〇名、家屋の全壊一〇戸、半壊九戸を出したが、これは有明海沿岸に集中したものであった。

ジュディス台風来襲二週間後の八月三十日、三十一日に豪雨が降り、災害復旧に取りかかっていた工事現場に再被害がでた。

ここではジュディス台風関係の被害のみ記すことにした。

図11　ジュディス台風気象図

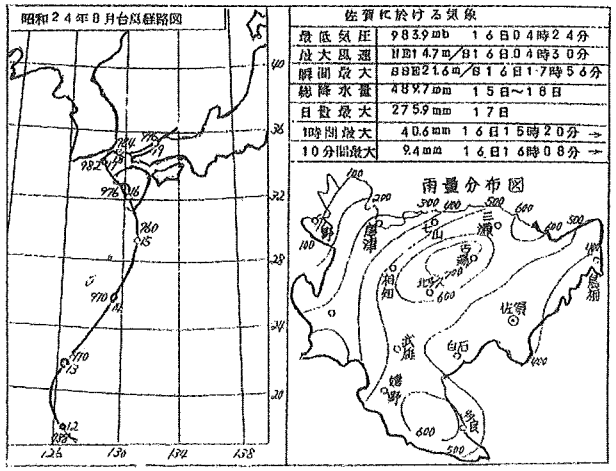


表8　ジュディス台風県下各地の雨量

地区＼8月	14日	15日	16日	17日	18日	総量
佐　賀	15.8	5.5	381.7	92.3	0.2	495.5
三　瀬	14.5	13.4	183.2	126.5	5.3	342.9
古　湯	0.0	24.5	183.4	496.2	62.0	766.1
北多久	0.5	22.5	251.9	94.7	3.8	373.4
唐　津	0.1	2.1	240.7	67.1	4.2	314.2
伊万里	0.0	30.5	175.0	115.0	4.0	324.5
白　石	4.0	40.0	350.0	522	1.6	447.8

佐賀郡久保田村洪水並被害統計表

昭和二十四年八月二十九日　久保田村公民館調

部落名	洪水発現日時	最大水深及日時	水田冠水日時	洪水消滅日時	死者 行方不明	重軽傷者	流失全壊家屋	半壊家屋	浸水 床上	浸水 床下	総戸数	総人口
徳萬	十七日午前九時三十分	十八日午前三時	一六二時間	十九日午后二時					一四二	八一	一八一	九〇六
快萬	〃	〃	四八	〃				一	八四		八四	四三
小路	〃	〃	〃	〃		三		一	五四		五四	三〇〇
草木田麦新江	十七日午前十時	〃	〃	二十日午前中					五〇		五〇	三四四
新田中副	十七日午前九時半	〃	八〇	〃			一	一	九七		九七	五一四
横江金丸	〃	〃	八〇	二十一日午後八時				三	五八		五八	三一九
永里下新ケ江	〃	〃	一六二	〃				一	一〇二		一〇二	六〇五
上新ケ江	十七日午前九時四十分	〃	一六二	二十一日午后七時	一				五六		五六	二八一
福島	〃	〃	八〇	〃					二二		二二	一二八
福所	十七日午前九時三十分	〃	八〇	二十一日午后三時					四三		四三	二六六
上恒安	〃	〃	〃	午后二時					三二		三二	一六〇
下宿満	〃	〃	一〇〇	二十一日正后					一〇三	三	一〇六	五四五
北田	九時十分	〃	一六二	二十二日午前六時					二三〇		二三〇	六一〇

この水害模様について昭和四十六年刊の『久保田町史』に次のようにみえる

川上川は山岳で降った多量の雨量と土砂の流出に堪え切れず、川の溪口を出でて、嘉瀬川の基部を三百米位下った右岸堤塘を破り、佐賀平野の西南部を奔流し、久保田の南限松土居や、牛津川の堤塘まで打ち寄せた。このために牛津川堤塘はついに欠壊。そのために芦刈村は、有明海の満潮時に海水浸入の被害を受け、高潮同様の損害を蒙る破目となった。

久保田では松土居でとめられた濁水が、ヒサシまでも達するに至って翌日を迎えた。ところが翌十八日になっても濁水は増加の一途を辿るのみだったので、福庄江下流の奉賀井樋上部の堤塘を切り開いて、濁水放流の非常手段を取ったのであった。

十七日濁水が流れ入っても、床下に浸水しても、古老たちは、つぎのように言っていた。〝久保田は八筋濠を通し、福庄江や、三丁井樋や、嘉瀬川の福富、久富の潮井樋から放出するから、明治維新以来床上浸水したことはない。祇園川の堤塘や、木島溝、宝琳寺附近など何度も欠壊洪水があったが、床上浸水には至らなかった〟と。

というようなことで久保田村は、このときも安心して、床上浸水の準備などは殆んどしてなかった。ところが事実は畳の上、

部落名	洪水発現日時	最大水深及日時	水田冠水日時	洪水消滅日時	死者 行方不明	重軽傷者	流失全壊家屋	半壊家屋	浸水 床上	浸水 床下	総戸数	総人口
搦東西	十一時	〃	〃	二十二日午前中					二一八		二一八	七三二
久富東西	十二時	〃	〃	〃		四		一	一五九		一五九	九二七
大立野北東	〃	〃	〃	〃					一八〇		一八〇	九六四
福富	十七日午前十二時	〃	〃	〃					六〇		六〇	三一九
帰農											一四	五九
総計			二四時間―一六二時間		一名	二六名	一戸	九戸	一、四八七戸	二戸	一、五四三戸	八、四〇〇人

二、三尺の浸水となり、家の建具類はもちろん、保有米、麦、味噌、醤油、漬物、炊事用具、タンス、長持、衣類まで、大部分の家庭では水びたしとなった。また十八日になると稲藁小積、麦藁小積が浮んで流れ出し、小積の上には鶏、犬、猫などが乗って流れ去る有様。

放尿（小便）は屋根の上からやっていたが、大便には困った。特に女子は誰でも閉口の態。ついには新聞紙などの残存紙類、ボロギレなどを用いて、屋根の上で用を足す仕末であった。

このほか落雷被害については左記の記録が残っている

○大正十三年七月三十一日、久保田村わら小屋に落雷、同小屋を全焼、損害二〇〇円　同西肥板紙会社送電線に落雷。同天理教会屋根に落雷瓦一五枚、柱三本損害

○昭和十二年八月二十八日　久保田村西肥板紙株式会社工場配電室に落雷

災害には気象災害などの天災と地震のような地異がある。佐賀県は地震が少なく、本町でも記録に残るような被害は残っていない。先の『久保田町史』には、明治三十一年八月中旬、久保田一帯に大地震が発生したとあるが、被害などの記載はない。

災害にともなって疫病がでたり、飢饉になったりする人災も多い。火災などは人災に入るが、久保田町では今日まで、それほどの大火災は発生していないが、いくつかあげれば

明治二十五年二月二十六日、久保田村役場の全焼、昭和二十年八月五日、アメリカ空軍機の爆撃で、久富地区六八戸が全焼、四人が死亡している。

戦後最大の火災は昭和三十一年十二月八日、久保田村役場および久保田農協事務所の全焼火災であった。

『佐賀郡消防のあゆみ』（昭和五十九年三月刊）より久保田町関係の火災を別表にしてみた。

久保田町火災発生概要

年月日	火災の場所	内容（状況）
昭和三五・二・三	搦東　大石　岩雄	
三七・三・一二	搦東　南川　又三	
三八・二・二一	新田　思斉中学校	
三八・三・二九	小路　松尾　雄二	
三八・一一・一一	草木田　志波　徳市	
三九・三・二七	北田　佐賀板紙（株）	
三九・五・二五	久富西　古川　喜八	
三九・九・二九	久富西　富崎　末夫	
三九・一二・一三	下新ケ江　陣内　松雄	
四〇・一・三〇	中副　中島かおる	
四〇・二・二八	快万　古賀　良次	
四〇・二・二八	搦西　太田　太六	
四一・三・九	草木田　末永　廣吉	
四一・五・二八	下新ケ江　中野　春義	
四一・一一・九	上新ケ江　鶴丸　繁雄	
四四・一一・六	中副　古賀　友記	
四六・一一・二	福富　船津定次郎	籾乾燥小屋
四六・一二・一三	福富　窓乃梅酒造（株）	社員住宅　全焼
四七・三・二五	上恒安　森田　義春	
四八・一〇・六	搦西　鶴丸　栄三	

年月日	火災の場所	内容（状況）
四九・六・一	新田　副島　栄秦	
四九・九・二二	北田　田中今朝六	
五〇・二・五	中副　森本　正幸	住宅　全焼
五〇・一一・四	北田　佐藤　進	
五〇・一一・一一	永里　久保田町農協	カントリーエレベーター
五一・七・一一	久保田宿　中島広次	
五一・九・一五	上恒安　藤瀬　勉	
五一・一〇・八	徳久　永倉　三郎	
五一・一〇・二九	掮西　右近円太郎	
五一・一一・一九	新田　小高産業	カントリー隣籾穀
五二・一〇・一九	掮東　中尾　保平	
五五・三・二〇	草木田　木下　松男	
五五・五・六	北田　田村　俊一	久保田駅
五五・六・一〇	麦新ケ江　横尾　松代	
五五・七・二二	中副　塚原　盛男	藁倉庫
五五・七・二五	草木田　志波　ナミ	
五六・三・一	大立野北　小森　敏幸	住宅
五六・五・一二	中副　塚原　盛男	藁倉庫
五六・一一・一〇	中副　塚原　盛男	藁倉庫
五七・二・一三	新田　思斉中学校	道場・特別教室他　全焼
五七・二・二二	久富東　江越　徳雄	
五七・三・一一	久保田宿　江越　徳雄	

年月日	火災の場所	内容（状況）
五八・一・二六	町西　香月　清人	
五八・五・二	福所　田中　隆範	
五八・五・二七	福所　中島　操	
五八・八・一〇	快万　片渕　正春	
五八・八・二六	新田　小高産業	
五八・一〇・三〇	北田　蘭　和美	住宅　全焼
五九・一・四	久富東　船津丸四郎	
五九・二・一五	久富東地先　建設省	
六〇・四・一八	中副　深川　四郎	嘉瀬川河川敷　雑草火災
六〇・八・四	中副　原田　茂	住宅　全焼
六一・六・一四	江戸　陣内　勝裕	
六一・一〇・一二	新田　久保田町	改善センターのステージカーテン　ぼや
六二・二・一四	草木田　志波　繁雄	
六二・一〇・一四	福所　牟田　和男	
六二・一二・三	下満　中尾　照義	住宅　全焼
六三・五・一	江戸　藤木　保昌	住宅
六三・七・三一	快万　有明乳業佐賀支店	消防団出動無
六三・一二・四	北田　佐賀板紙輸送センター	消防団出動無
平成一・五・三〇	町東　鶴丸　時長	
一・八・一二	下新ケ江　福田工務店	資材倉庫
二・五・二八	快万　江口　栄	自動車板金塗装工場
三・三・二	福所　大坪　俊治	ハウスボイラー

年月日	火災の場所	内容（状況）
三・一〇・八	福所　藤木　久男	住宅
四・三・一六	大立野東　上北　芳利	消防団出動無
四・九・一九	下満　松田アヤコ	消防団出動無（スナック・ミンク）
五・四・四	久富西　船津丸マチコ	住宅・ぼや　消防団出動無
六・八・一二	草木田　寶林寺（林快川）	雑草火災　墓地の周辺部（非火災扱）
六・八・一七	草木田地先　建設省	雑草火災　中学生の花火から（非火災扱）
六・九・六	小路　村田　和子	住宅　全焼
七・三・一五	久富東　中尾　正明	住宅・消防団出動無　ぼや
七・七・三〇	大立野東地先　建設省	雑草火災　消防団出動無（非火災扱）
七・九・二九	大立野北　久保田農産	ゴミ焼却の延焼・ぼや　消防団出動無（非火災扱）
七・一一・二〇	中副　野田　良弘	住宅（台所）ぼや　放水無
八・一・三	麦新ケ江地先　建設省	
八・一・二八	新田　夏秋　道博	住宅・消防団出動無　ぼや
八・二・二四	大立野東地先　建設省	嘉瀬川河川敷　雑草火災（火災扱）
八・八・四	搦東　力久　栄	住宅（台所）ぼや　消防団出動無
八・一〇・一	快万　中野　吉實（農協長）	Aコープ　ぼや　消防団出動無
八・一〇・五	快万　中野　吉實（農協長）	Aコープ　ぼや　消防団出動無（放火疑）
九・八・一三	中副　平　龍三郎	工場　ぼや　消防団出動無
九・九・一一	久富西　原口　朝光	工場　半焼
九・一〇・二七	中副　中島　敏治	住宅　全焼
一〇・九・一八	横江　西岡　安義	住宅（台所）　ぼや　消防団出動無
一〇・一一・一五	徳間　坂井　正光	竹藪火災（第一部のみ放水）（非火災扱）

年月日	火災の場所	内容（状況）
一〇・一一・二九	久富東　原田　勲	住宅　全焼
一〇・一二・二六	横江　塚原　義大	住宅・小屋　全焼
一一・	下満	車両火災　消防団出動無
一一・	小路　古賀	住宅　消防団出動無
一二・一・一六	町東	車両火災
一二・一一・二七	小路　江越正道	住宅　全焼
一三・六・二六	久富東	車両火災
一三・九・二六	下満	車両火災
一三・一二・二一	久富東　佐城農協	与雀ん館　ぼや
一三・一二・二三	小路　村田和子	住宅　全焼
一四・一・一一	快万　龍徳板金	ぼや
一四・一・一四	新田　思斉中学校敷地内	電柱火災

(八) 動植物

久保田町に生息する動物・植物は多種多様あるが、この地域だけに生存生育するという特有の生物は少ない。ただ全国でも特異な海として知られている有明海と嘉瀬川や堺川の河口に当たるため、特色ある魚介類や水鳥を観察することができる。

しかし、近年は農薬の普及や生活用排水、工業用排水などによる河川や河水の汚染によって魚介類の環境が変

化している。また、干拓事業の進展よって、護岸工事の工法がかわり、堤防などコンクリート化され、昔のような葦の茂った土堤のようなものも少なくなったので、小蟹や水鳥の産卵場所も少なくなり、圃場整備などでクリークも規格化され、すっかり景観や環境も変わって、次第にその姿を消そうとしている。

1 動物

現在生息している哺乳動物は、家畜を除くとごくまれで、イタチ、モグラ、コウモリくらいで、戦前まではイタチが鶏を襲った話をよく聞き、夏にはコウモリがいたるところにいたが、現在ではほとんどみることはできない。

鳥類ではスズメ、ハト、カラス、ヒバリ、カワセミ、カケス、ヒヨドリ、ホオジロ、モズ、メジロ、セキレイ、ウソなどが営巣する。この中でよく知られているのは国の天然記念物に指定されているカササギで、本町にもいたるところ営巣している。これに似たオナガや晩秋初冬、大群で渡来したミヤマガラスは見られない。

渡り鳥には夏鳥と冬鳥があるが、夏鳥にはツバメ、ヨシキリ、バン、シラサギ、ゴイサギなど南方から渡ってくる。もっともサギ類の中にはゴイサギのように留鳥になって一年中いるものである。

冬鳥でもカモは非常に多く、ガン、オシドリ、シロチドリ、シギなどが、有明海の干潟で遊ぶ姿がみられる。小鳥ではツグミ、タヒバリ、アトリ、背中に小紋をつけたジョウビタキなどが北方からやってくる。この中でめずらしいのはツクシガモ、トモエガモ、アカツクシガモなどで、探鳥会などでも人気のあるカモである。

爬虫類ではアオダイショウ、シマヘビがいる。昔はネズミを取るというので、農家では殺すことがなかった。たまには毒をもつマムシもおる。トカゲ類ではトカゲ、カナヘビも多い。また方言でグーツと呼ばれている石亀やスッポンもたまにはみかける。

両生類では、トノサマガエル、ヒキガエル、ツチガエル、樹上にもはいあがるアマガエルも多い。近年は食用ガエルのウシガエルが繁殖し、夜、大声で鳴くので、安眠を妨げるところもでてきている。

魚介類は海水産と淡水産に分かれる。海水産は有明海のものである。魚類でよく知られているムツゴロウ、ワラスボ、ハシクイ（ハゼクチ）、エツなどは、この地方独特なものである。このほかボラ、グチ、メナダ（アカメ）、スズキ（ハクラ）コノシロ、クチゾコ、カレイ、ヒラメなど泥海を好む魚類が多い。嘉瀬川、堺川につうじるクリークには、フナ、コイ、ハヤ、ナマズ、ウナギ、ライギョなどがいる。近年ライギョが多く繁殖し、他の川魚の稚魚を補食して、川魚のギャングとしてきらわれている。フナは戦前まではほとんどマブナで、みみずでよく釣れていたが、近年はヘラブナが多くなり、植物性の餌でないとよく釣れなくなっている。

貝類は戦前まで「カキ」が養殖され、一般には「住ノ江セッカ」の名で知られ、中国まで輸出されるほど盛況な時代もあった。「カキ」は弥生時代の貝塚からも多数出土しており、古くから生息していたことが確認されている。貝類での珍種は「メカジャ」、学名「シャミセン貝」で化石時代からの生命力を持続させ、ものすごい繁殖力をもっている。戦前までは肥料にも使われていたが、農薬の使用などで「世紀の生物」も危機を迎え、近年では貴重な食べ物になっている。このほか「ウミタケ」「アゲマキ」「ハイガイ」「タイラギ」などがいる。

エビ・カニ類も種類が多く、エビ類二九種、ヤドカリ類一三種、カニ類九六種、その中で佐賀名物で知られ

表９　有明海特産・準特産生物

有明海に生息する生物	有明海以外の分布	
特　産　種	国　内	国　外
エツ アリアケヒメシラウオ アリアケヤワラガニ	な　し （世界で有明海のみ）	
アリアケシラウオ	なし （日本でも有明海のみ）	中国～朝鮮半島
ハゼクチ		中国
シロチチブ		？
ムツゴロウ	（八代海の一部にも）	中国～朝鮮半島（～ビルマ・マライ・インドシナ）
ワラスボ		中国～朝鮮半島（～インド）
ヤマノカミ		中国～朝鮮半島
アリアケガニ		中国～朝鮮半島
ヒメモクズガニ		中国～朝鮮半島
ヒメケフサイソガニ		中国
ヒイロカワザンショウガイ		中国
シマヘナタリ		中国～朝鮮半島
オオシャミセンガイ		中国
準特産種	国　内	国　外
トサカギンポ	西日本	中国
タビラクチ	八代海・瀬戸内海	？
ナメクジウオ	相模湾以南	中国～インド
シオマネキ	日向灘・瀬戸内海	中国～朝鮮半島
ハラグクレチゴカニ	房総半島	中国～朝鮮半島
アキアミ	八代海・日向灘・瀬戸内海・富山湾	？
チクゴエビ	日向灘	台湾～ジャワ
ベイカ	長崎・大村湾・瀬戸内海	？
クマサルボウ	瀬戸内海	なし
タイラギ	房総～九州	？
スミノエガキ	四国～九州	？
アゲマキ	瀬戸内海（児島湾）	中国～朝鮮半島
ウミタケ	本州中部以南	？
クロヘナタリ	瀬戸内海	？
サキグロマツメタガイ	瀬戸内海	中国～？
ウミマイマイ	瀬戸内海	なし
ミドリシャミセンガイ	本州以南	中国～フィリピン、インド

（菅野徹・「有明海博物誌」所載）

「ガニ漬」の材料になるシオマネキは、日本唯一の生息地で、雄は左右のハサミが大小異なり、大シオマネキ、ヒメシオマネキ、白扇シオマネキの三種がある。通称竹崎ガニの名で知られているガザミは、有明海の沖合いで獲られており、観光客に喜ばれている美味のカニである。シャコも「麦シャッパ」といわれる五月ごろがうまい。

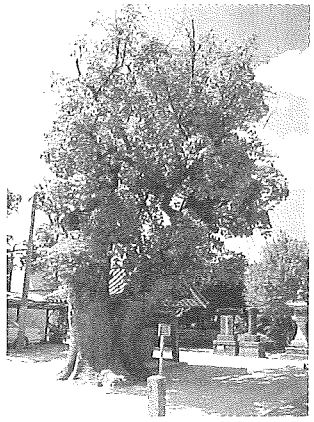
近年、有明海で急変したのは「カキ」の養殖にかわって昭和三十二年頃からノリ養殖が盛んになり、冬期の有明海にはノリヒビが林立して、現在では本町を代表する産業の一つになっている。

なお、独協大学の菅野徹氏の「有明海、大陸系遺留種の魚たち」の研究論文によると、表９のように日本では有明海にのみ生息する貴重な魚類が一五種もおり、また準特産種として貴重魚介類が一七種もいることがわかっている。

これらの生物は有明海の誕生からの生き証人として、約二万年も生き続け、その昔、東アジア沿岸と交流のあったことが立証できる大陸系遺留魚といわれている。

２　植　物

植物も佐賀平野部の他地域と特別変わったものはない。平野部でクリークの分布が多いため、水生植物が多い。本町では古くから多く繁茂していたのは、ヨシ、マコモ、キシュウスズメノヒエ、ハス、ウキクサ、ヒシ、アゼガヤなどであった。特に久保田ヒシは味のよいことで知られていた。戦後はホテイアオイが急激にふえ、堀一面を覆うようなこともあった。このため町ではホテイアオイを害草として除草する方策を実施している。



香椎神社のクスノキ

路傍などにはセリ、ナズナ、ゴギョウ、（ハハコグサ）ハコベラ（ハコベ）ホトケノザ（タビラコ）の春の七草をはじめ、ヨメナ、ノビル、ヨモギ、スミレ、タンポポ、レンゲソウ、オオバコ、アザミ、ツユクサ、エノコログサ、ススキなど、また薬草ともなるドクダミ、ゲンノショウコ、ヒガンバナなどもみられる。

樹木は山地ではないため後年植樹したものが多く、常緑樹ではクスノキが多い。佐賀県農林部編の『佐賀の名木古木』（昭和五十一年）には、本町関係の名木古木として香椎神社のクスノキ（樹齢三〇〇年）が記載されている。

マツは社寺や旧堤塘に植えられていたが、マツ食い虫の被害などにあって、古木はほとんど枯れてしまった。このほかツバキ、イヌツゲ、ネズミモチ、クロガネモチ、スギ、マキなどある。落葉樹のエノキのほか堀岸の護岸のため、柳を植えているところも多い。また江戸時代、佐賀藩の奨励によって木蠟をとるためハゼの木を植えさせたが、いまではほとんど残っていない。竹類ではマダケ、カンチク、シノダケなどで、モウソウは少ない。果樹は柿、柚（ゆず）、ブシュカン（仏手柑）など自家用に栽培したもので、とくにみるようなものはない。

原始・古代

上恒安遺跡出土の土器群（古墳時代初め）